

## 宮田収容所（福岡第9分所）メモ

(エステル・ジェニングスさんの亡夫、クリントン・ジェニングス氏が収容)

1943.12.4 福岡捕虜収容所第20分所として、福岡県鞍手郡宮田町に開設。ジャワよりオランダ兵（蘭領東インド陸軍）407人到着

1944.4.10 第12派遣所と改称。

1944.6 (1?) 台湾より261人 (281?) (主にイギリス人将校) が到着

1945.4.25 102人 (大半は上級将校) が満州に移送。

1945.6.20 イギリス兵100人が到着。

1945.6.26 アメリカ兵45人が到着

1945.8 第9分所と改称。

1945.8.15 終戦

1945.9.? 帰国の途に着く。

●終戦時の収容人員は792人(蘭495、英243、米43、豪11)

●収容所は丘に位置し、木造の捕虜宿舎、食堂、娯楽室、炊事室、事務所、日本兵宿舎、病舎などから成り、周囲が高い木塀で囲まれていた。

●日本人職員は約40人。所長は何人か交替したが、最後の所長の時期(45.5～終戦)は「恐怖政治の時代」と言われ、捕虜たちは精神的にも肉体的にも苦しめられた。

●捕虜たちは貝島炭鉱大之浦炭鉱で使役され、第2、3、6抗の4カ所で働いた。初めの頃の仕事量はまあまあだったが、次第に増え、最後にはとてもこなしきれない仕事量を要求され、少尉や見習士官まで働くことを強いられた。

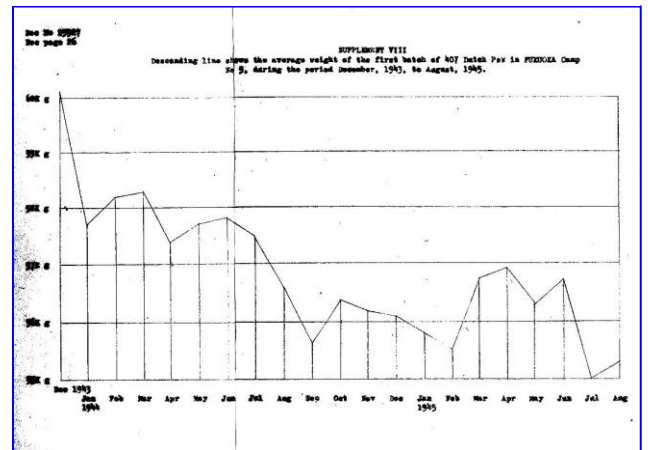
●食糧は乏しく、飢えに悩まされ、終戦時点の捕虜の平均体重は54.5キロだった。何人かは40キロ以下で、最も少ない者は37キロだった。グラフは、オランダ兵407人の43年12月から終戦までの平均体重増減表である。

●収容中に47人が死亡した。死因の多くは肺炎、脚気、栄養失調などで、炭鉱の落盤事故の犠牲者もいた。

●戦後、この収容所の職員7人が戦犯となり、最後の所長は終身刑であった。



終戦直後の収容所



オランダ兵405人の平均体重増減表



終戦後、物資投下のパラシュート生地で作った星条旗

(文責：笹本妙子)